

る筈はないのでありますから、遺跡に照して見て史書に粗略な點があるのは、誠に止むを得ない次第と存じます。次の宋の時代になると、ウイグル民族が宗教を信じて居つたと云ふ記事は澤山あつて何等疑ふ餘地はないのであります、斯う云ふやうな譯で先づ唐の末の方から彼等の間に佛教が行はれたものであると考へられるのであります、それだけの事を御話して置いて、さうして佛典の事にはいりたいと思ひます。

只今申上げましたやうに、唐の時分に佛教が此の民族の間に行はれて居つたものであるといふ記事は、史乘の上に殆ど見えて居りませぬからして、従つて此の民族の有つて居つた古い佛典に對して注意した學者は近頃迄は甚だ少いのであります、しかし全くないのであります、ウイリー氏は最初に之に注意して大部分の佛典はウイグル語に翻譯せられたものであらうと云<sup>⑩</sup>ひ、ラクーペリー氏の如きもまたこれに就て考を持つて居つた人であります、氏の考に依りますと、多くの佛典は古くからウイグル語に譯されたものであらうと云ふウイリー氏の説を認め、それに續いてウイグルは早くも五世紀の半ば頃、ネストル教徒に依つて持つて來られた所のシリヤ字から作り出したウイグル字を以つて、支那の論語であるとか、或は孝經であるとか、或は毛詩などを翻譯したものであるといふて居ります、それだからラクーペリー氏は此のウイグル族を非常に古くから現はれて居るものであると考へて居ります、従つて其の佛典もまた非常に古くからウイグル民族の間に存して居つたものであると云ふ風に認めて居るのであります、けれども是は少しく考へて見ると間違つた考であると云ふことが分ります、一體氏の此の説は何に據つて言つて居るのであるかと云ふと、支那の北史に基いて居ることで、その高昌の國の文化を述べた所に、高昌の國の文字は支那と同じであるが一方に胡書を用ゐて居る、毛詩、論語、孝經などがあつて、學官を置いて教